

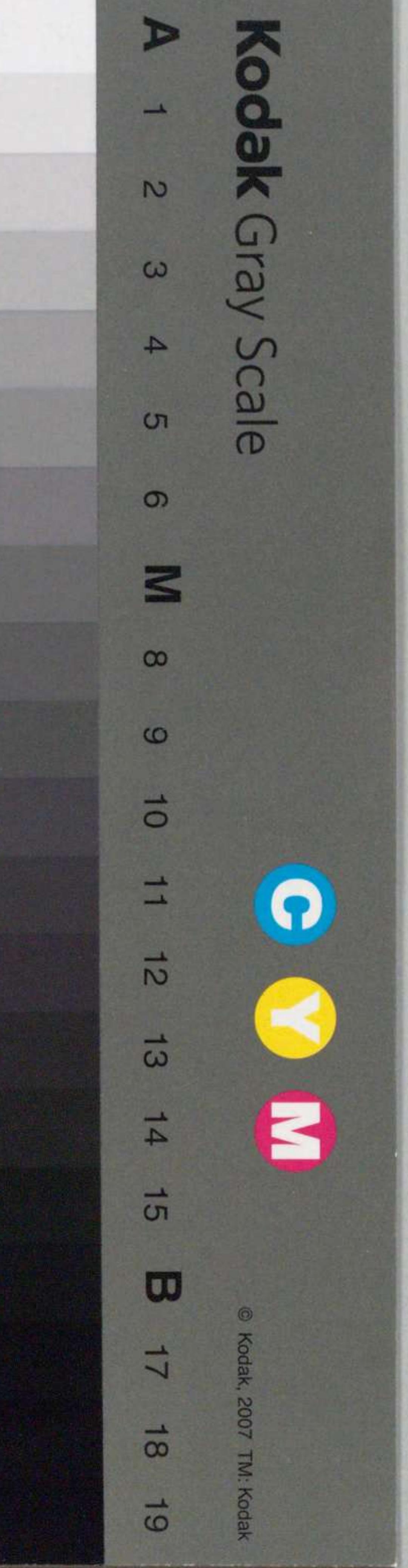
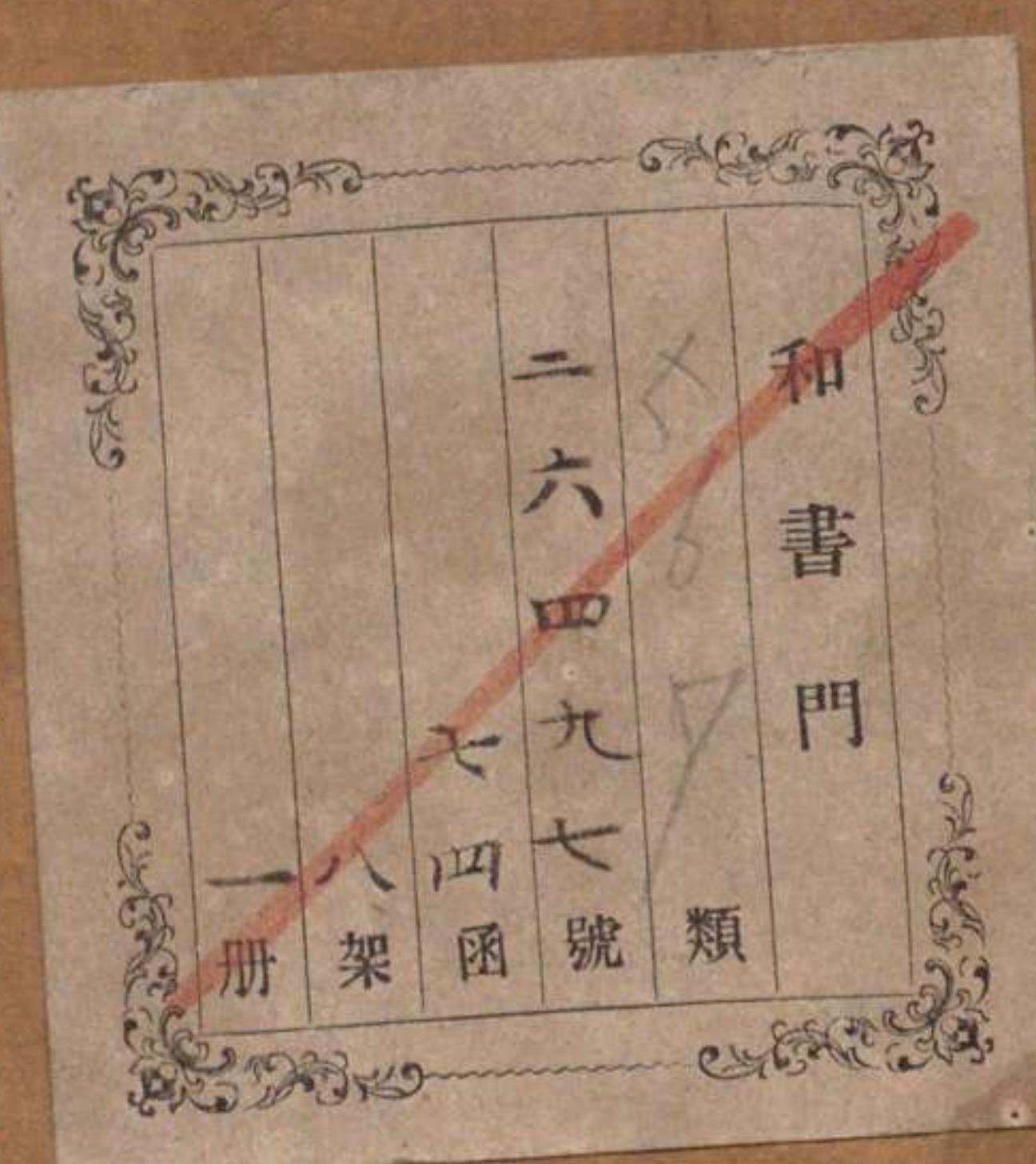
至誠堂百詠

全

文庫内閣	
二六	七
一七	冊
架	類

内閣文庫	
番號	和 26497
冊數	1 (1)
函號	206 384

206-384



荊山日尾先生著

至誠堂百詠

萬延紀元秋八月

至誠堂主清原

淺草文庫

詩情未盡也凡人多所遺悅
舊懷乃空以廢之無以好更復以
寫忘以吟之忘歌之無以傳之
狀以之娛之無以節之多以石
紫之寫以之多以舊之多以

序

以成國事之原精神雖有
空言往焉多以展覽為所
於事以於凡人是至他人
固宜無以於就事之多先
河多山先生幼而攻窮
夙夜以學業為務著述亦

清高而疏寓代以儒之也
得應貌於權而處之不驚其
此之有乃之所能以予之院其
家人之方而以改授而先而存
能革文之於不素以為前後
後學生力之多也斯為從矣

性朴至極情自可來為悅おど
而此處多是也以故多教承
之有得失自以故之多之者有
之有失之窮也之於於於
之失之者也多之於於於
而未論及於事居多之故

二

而政事の如くは思が大體
言ひ能はる所から所をもと
之へての所なり所の所をもと
義理悦よめにあらんと云ふ
多告多聞の事其れが多聞
西多ふ多聞おぞきもゆかせ

支那の日本作成の書類は國の重要機密
を扱うものと文印あり也。七八年
前より政府の主な施政の面に於て又
郵便機関の普及に伴ひ申設
局が之に付合する形で其の運営も
極めて複雑化され其の運営も常に
機知の發揮を要す。而

三

支那の日本作成の書類は國の重要機密
を扱うものと文印あり也。七八年
前より政府の主な施政の面に於て又
郵便機関の普及に伴ひ申設
局が之に付合する形で其の運営も
極めて複雑化され其の運営も常に
機知の發揮を要す。而

吉田のゆき
梅子 梅

至誠堂百詠

荆山日尾瑜德光著

男

敬 輯

己酉癸卯元旦

昨夜謁來姑射人夢回枕上點無塵紅輪一轉三千

界復值乾坤開闢春

神韻新

新春

屈指鏡中霜鬚驚可憐落拓老書生小園尚有新春

至閑嚼梅花解宿醒

己未元旦口占

玉漏聲殘斗柄回滿城春色霎時開半天晴雨明新

柳一徑和風香老梅煙靡村坡人彷彿雪消河畔鶴徘徊耄生七十渾無用經學文章易酒杯

早春口號

嫩草如煙柳似絲遠山近水望依微春光動處黃鸝
轉踏落梅花雪一枝

醒齊居士書堂集同賦得花濃春寺靜
探春拋卻有無情祇樹香風眼界清色即是空空卽色百花深鎖木魚聲

春閨

無窮春恨鎖煙楊晝漏沉沉日自長閑夢驚回花影
靜一雙新燕語雕梁

律

村行

苔徑一條分綠平炊煙濃處午雞鳴傍塘茅屋初行
盡柳際時聞水碓聲

夜行

煙塘春月柳陰斜水面濛朧翠靄遮試和前灣吹笛
去漁舟橫處落梅花

夜興

梅籬移榻憶詩盟如睡如醒別有情春月朦朧人不見
微風隔柳送笙聲

牧童

雨晴平野綠依依度柳穿花蝶飛三里春風三里

全蜀王氏詩

路濛濛牧笛任牛歸

澄水如鏡

雨霽清池無點塵妍妍明鏡琢磨新寫來嫩柳嬌花影水底徧疑別有春

江村尋梅

橋畔雪融泥未乾梅花探去眼先寒影翻水面明於畫一萼還爲兩樹看

池塘春草

窓前日上夢初醒忽見韶光滿小庭昨夜池塘春雨後風回嫩草一環青

江府春

滿城春氣麗節物迎人嬌鐘咽雲閒寺日斜雨外橋野桃紅萬點塘柳綠千條江水浮山遠詩眸逐晚潮

墨河堤口號

風吹花片送清香十里芳塘興自長遮莫醉吟歸去晚春光濃處是吾鄉

庭梅

淡淡疏疏亦奇橫斜苔砌倚荒籬老標瘦骨有香耳太似荆翁病酒時

和歌題野外梅

脫出離騷幾點塵冰葩玉蕊自精神清癯獨立郊原上卻似行吟澤畔人

至誠堂百言

二二

詠櫻

東方二月暖洋洋綴玉櫻花鬱似浪清艷全欺神女
珮芬芳直壓大真囊停雲簇嶺風無跡飛雪遞空月
有香多謝春光千萬里憑君幾許繡詩腸

垂柳遮月

醉步歸家小逕迢苦吟求句立溪頭翠煙篩月濃如
畫數盡垂楊幾百條

晚風送我葛巾斜堤畔行吟未至家飛月如梭柳如
縷織成一段翠輕紗

首夏江村

取次漁村抹晚煙柳陰濃處漱清川一條界破春兼

夏南岸殘花北岸鵝
綠葉江邨煙雨淵新鵠髡婦送扁舟漁翁未試堅魚
珠先向武城城裏售

首夏

風翻新綠雨初晴午枕併醒夢與醒時間卯花消息
去隔牆閑報搗荼聲

池邊待月

小園日暮雨涼餘待月碧塘移步徐忽有銀鉤雲際
落柳條倒釣半池魚

鳴蛙晚喧

草堂日暮雨初晴庭畔風清池水明呷呷群蛙成底

事無端攬了讀書聲

灌佛

綴翠裁紅灌佛場奇工擬得雨花香笑他汝浴煎苓水

邦俗浴佛必用煎苓水

不用一盤般若湯

芙蓉出泥

風過水面石橋馨拍岸潺湲疊綠萍點破渾渾泥世界

花之君子潔亭亭

題八橋燕子花

一入小橋橫又斜履痕香動紫煙遮唐衣詞客今何在萬古夢殘燕子花

和歌題雨後月

快雨忽過煙樹村新涼入褐已黃昏驪龍昇去雲遙盡印得青空玉爪痕

季夏口占

三徑無人草色平猫兒驚蝶夢初醒簷前秋近微風動竹露吹翻鐵馬聲

初秋

新涼才動袂先知閑弄蛩聲繞小池風柳告秋飄一葉化成天上嫦娥眉

秋日行圃

乍過蓮池乍竹坪泉聲聞罷更風聲草閒促織誘人切緯萩經蘆仔細鳴

王誠堂百詠

五

籬下菊

悠然兀坐矮籬傍謾嘯涼天舉巨觴飲似陶公詩不似醉來多謝負秋香

睡後茶興

起來認得焙茶香自汲寒泉傍石牀乍動鼎中秋氣去松濤一沸煮清涼

秋夜宿山居

卷舒梢上老兼莊乙朱點青攬爐香夜鶴嚇離松影冷淵空白露月如霜

秋夜宿山寺

偶宿僧房乏內醪佛燈分得讀離騷一聲呦鹿山簫

索孤塔秋風曉月高

秋夜偶題

閒中拈筆卻多忙燭影添寸夜漸長牀下鳴蟲聲轉冷明朝定是有新霜

長安秋思

書窓寂寂夜清幽銀漢無聲爽氣流砌角寒蛩梧蔭月一齊併作斷腸秋

麻姑山詠雁

落木葉紛紛南歸數陣陣分含蘆且整隊傳信獨離羣帶雨翎荷月度關聲咽雲風恬波靜夕嘹唳落江漬

秋夜江上聞笛

望城壁百詠

白雲明月十分秋露濕客衣涼欲流鐵笛數聲人不見江山一碧寂悠悠

落葉

氣霽山村秋色空斜陽一抹淡煙籠何須錦雨著蓑笠烏臼林邊立晚風

觀刈

身汗淤泥諷有年濁醪當茗飲堤邊數畦刈盡孤村夕纖月學鎌落水田

秋夜山亭

慨然忘卻讀書心慕古歎今思不禁哀雁叫霜霜似雪山萬木落月凜凜

見此題七夕雨中對酒醉中賦此
書堂開宴坐來悠笑舉巨觴對女牛銀漢波明千里
色鵲橋月自一天秋涼驅炎暑侵朱箔風攬管絃入
碧樓沈醉掉槎清夢裏窮河源未踏雲遊近胥空愁
七夕後一日看牽牛花

星河影沒夢空殘花塢橫煙曉露寒都是結成無限
恨天孫香淚碧溥溥
九日有感
陶家學得絕風塵斗米元來不屈身青酒三杯何厭
少黃金一簇豈愁矣題糕箋面恥詞舊落帽遺毛驚
雪新休訝莫囊無繫臂此翁爲效捧心顰

畫閣朴月黃蠟拂素絲
圓月當窗分外涼
溝光滿地白於霜
參差竹影橫梧上
塗抹南華三四行
米家來不厭良苦
醉三林醉酒氣
醉山洛橋步月
日暮雨晴花草鮮
洛陽城畔鬪秋娟
一江明月波千里
吟破水晶橋上煙
身汗月下擣衣

清風明月授衣秋
萬里思人颸不休
杵影通宵空撩亂
丁東擣起百般愁

季秋下江天
日暮雨晴花草鮮
洛陽城畔鬪秋娟
一江明月波千里

長江映曙暉
兩岸杳依微
山壓危牆出雲翻
激浪飛

氣晴遙鳥路木落近漁磯帆滿舟行
駛疾風搏客衣

和歌題初冬時雨

滿園小雨滿園風
瑟瑟報冬樹
樹空清曉踏霜吟
步去零楓深處屐痕紅

同閑居初冬

衡門何寂寞白露冷
蒿萊秋夢昨宵破
霜風穿徑來

同夜泊千鳥

滿江寒月徹肌清
蘆岸無人舟獨橫
夢破枕頭欹首聽
聲聲衛鳥蕩鄉情

將雪

雪氣侵來弊褐城
酒兵一隊未堪防
同雲淡淡天如

曉知是瓊花已釀芳

寒月如冰

銀漢冰圍大百圍輪輪滾滾轉空飛天風吹落寒江
上一道清光射我衣

雪

忽撲紙窓飄玉屑更侵疎箔篩銀沙煙柳千條跳舞
蝶寒塘一白點啼鴉

冬夜聽琴

清宵雪後起徘徊冰骨共憐牆下梅一曲彈琴人不
見高山流水月皎皎

山軒冰條

寒氣如刀割骨銛同雲釀雪雪威嚴夜深點滴聲漸
息懸盡茅檐冰玉簾

雪夜聽猿吟

几上讀殘坡老詩試吟寒月遙晴池山中雪滿猿聲
切應是慇懃子時

冬郊閑遊

樹疎山瘦石崔嵬風吼寒芒掠帽來纔認溪頭微暖
地泥融雪鑄款冬催

余在於江戶聞北越 大雪之話笑以爲虛誕
今茲遊歷於魚沼蒲原之間初知百聞不如
一見因賦一絕

同雲萬里裏坤乾徹骨酸寒疾似鞭雪壓鵬翎支不得一時搏落越州天

己亥除夜

米逋酒債償無錢遮莫浮雲不引誕討帳鬼生何用忿試看窓外笑梅妍

丙辰除夜

太平猶羸好男兒密勿着書還求毀香醪耳熟纔涉園阿拳舐毫強倚几二氣消長何有窮天運虛盈歸靡恃居諸如水誰能留鶴髮亂絲嗟老矣

蘆雁圖

木落野塘秋自生江流一道接天清寒蘆露凝風無

力孤雁翎低雨有聲

壽賀田道人六十初度

鶴髮先生岸帽紗笑傾大白酌流霞虛心豈覓升天藥幽夢時隨貫月楂浮閣煙雲長獻瑞滿階蘭蕙忽開花羨君箇裏顧神得壽筭恒河萬里沙

觀棋

棋聲寂寂日融融黑白一西還一東恰似唧枚軍卒至神機都在不言中

題梶原景季生田再戰圖

磊砢鐵腸推不移生田奮戰百軍披芳聲萬古流芬郁優插簾中梅一枝

至誠堂百詠

上二

恨別

酌酒茅亭分袂時遶山隨水思逶迤欲攀蕉葉題離恨已有村翁送客詩

贈行腳僧

手攜無碍鐵如意肯負神通妙法華堪羨芒屨兼筇笠飛雲流水好生涯

題源語若紫卷

雲濃法窟北山邊養病徘徊薄暮天明浦松濤夢先
馥契春嫩紫已嬋娟

近藤英齊有故退松屏舍塾歸鄉因賦贈之
腳底向處路頭寬乘酒誰鄉不結歡春日鶯花秋夜

月縱橫自在任君看

偶成

鶴衣蔬食樂清貧几上談兵笑此身商略世閒無限事痴情總屬讀書人

奉追悼楠公五百年遠忌

南柯夢破湊河邊慷慨空思五百年赫赫誠忠貫白日嶷嶷勳績凌蒼天舊愁未盡蘆洲雨遺恨猶深松塢烟泣血弔君君不見暮雲千里送啼鵠

楠公

自一辭廬見大君忠魂義膽泣三軍千秋遺恨南柯夢醒作湊河黯淡雲

讀赤穗義人錄

風寒簾外送吹簫醉夢峴過兩國橋一夜蟄龍攀岩去雪晴四十七星遙

聽雨有感

憶昔文場鳴不平傲然自許一儒生壯心銷盡人初老臥聽閑窓夜雨聲

述懷

豪氣一團猶未融奈何齒豁髮如蓬愚公能盡三杯酒負去愁山千萬里

送釋周觀歸參河

紅塵拂盡福田衣掛杖鉢囊過半詩夢碎別魂天際

遠松枝東靡月斜時

揮毫

吞却巨杯氣勢雄揮毫狂草動虛空天池倒瀉龍翻墨一幅乾坤雨與風

偶成

大咲江都一腐儒生涯坎壈老書厨蠻裝演武學兒戲肉食虛文無丈夫報國岳公高拋命抱奸檜賊永餘誅嗚呼華髮兼屏質何奈殉身塵狗胡

讀史雜感

談玄說理總啁啾月吟花皆汗管徒向豐城探寶劍不如橋下斬長蛟

覺陀山

半山霜樹半山松一碧一紅相映濃駐杖苦吟吟不得繡雲纏盡覺陀峯

塚山嶺眺望

千塚山豔麗秋此中底物適詩眸萩花撩亂粲如織挾澗紫風映日流

大塔宮土梧

雲深日月暗旌旗三十霜鋌誤鳳姿一篇空餘千古淚悲風動石砭人肌

霧降瀑泉

千仞岩門懸瀑泉飛流幾道落長天谿山搖動奔雷

吼雪浪漲花散作煙

管公九百五十回忌賦獻龜戶祠

繙史思悠悠挑燈泪濕裘梅颺香萬古松疊綠千秋靈威動天地至誠貫斗牛豈論如在德敦化與川流

閨怨

刺繡才收已夕陽荒園槭槭只微涼梧桐樹下傾銀釧屈指無端泪濕裳

觀克齊翁墨竹

枝枝葉葉疊鱗鱗滿幅清風拂俗塵固爲此翁風骨少毫端奪得竹精神

奉參丹生大明神兼寄能仁寺大禪師

此時爲能

仁寺某和尙修
丹生明神縁起

和光踏影影忘蹤雪月無情情愈濃折破丹生川上
夢空傳天外五更鐘

夜雨對燈

夜雨蕭蕭檐有聲書窓風冷濕柴荆痴蛾左計何須
撲起掩紗帳護短檠

題畫

雨晴村郊春光編樹壓孤橋濛舊晴閑撚吟牋欹角
巾山如翠黛水如練
樹蔭茅廬石澗涯自誇餘粟飽殘骸野翁不識繁華
事龍骨車邊織草鞋

競馬圖

金鞍白馬氣揚揚競捲風塵擅一場日激電光看不
見吳門匹練映鞭長

奉送府內明府初之提封

征旆悠悠揚氣自優山村水驛夏還秋松濤烟漾瓊瑩
浦鶴影雲群淡路洲雉劒制鼈蒼海坦畫虹弄筆彩
霞浮錦帆千里仁風遠草偃須期豐後州

題富士山

宇宙第一山四時白雪寒凜然適吾意宇宙第一山

題僧頸引圖

纏繩於項骨相引角力那俗謂之頸引

五箭一發括大智度論五欲謂化成纏頸繩彼我常

相引諦聽慕苴僧自力不可侈他力不可憑放下自他力始得乘大乘

睡龍贊

靈物之宅九重之淵淵暝水腥石柱嶙峋屈焉蟠焉懷壁而睡貞平假平潛以須時雲霧一興將翔天涯

偶成

投繙未得玉山鼈白結鵠衣此錦袍慷慨論文欹鶴骨衰痴講武震霜毛狂風遮莫淵明柳浥露堪憐仲蔚蒿痛飲何關無客至紙窓月白讀離騷

挽鶯

佳人贈我金籠子中有鶯兒羽翼美覲腕其目婉其

聲養得旦夕傍父兄俗耳鍼砭我能賞詩腸鼓吹誰得比口嘆麗水灑金衣手取香餅銅玉觜嬌語慰我徑三春能解我情能相親何事一朝相親盡目瞑翼蹙歸仙塵鶯兮抑何意秋月有恨數行淚春花無盡千般思秋月春花俱蕭索不如寫夏把酒酌唯憾我無扁鵲術不一投以回生藥遮莫浮生屬渺茫鶯兮鶯兮復奚傷醉歌一曲慙挽汝迢遙彼無何有鄉

贈菊池溪琴

讀海莊集有感因賦贈焉

南紀山水寇闕國余耳之而未之目山曰熊野峻極水曰那智轟空谷魑魅驕兮風雨腥龍蛇蟠兮雲霧冥山上瞪視振衣立時見修鰐徒南溟波浪倒翻

至誠堂百咏

上五

坤軸傾雷霆失措天亦驚變幼不測靈又怪須臾霽
怒日月明此中有人鍾山水之秀而其骨分腸共繡
其號海莊字士固興未意適詩輒就其綺靡者芳奪
蘭其佚宕者氣吞宇宙魑魅逃懸龍蛇蟄千言萬語如
彈丸言得咸中其肯綮清冰徹骨六月寒荆山老夫
生平氣岸漫嶙峋執拗未曾輕許人頃日迨讀君詩
卷清風穆至洗俗塵宛如凌滄溟遊瀛洲又似乘槎
至夫津嗚呼李杜杜今安在光燄萬丈使人慨四
維入荒若可尋與君攜手騎鵬背

至誠堂百詠

畢

毛利元就

若所考ふ主とわらひの傳ひ李文
也文之ふ文の伝をもとめぬとよおく
も承うる事無事所へて力合
れくその爲役を負ひてひそゝの事
同義力くと再びあはせりよりまへ
至る家大久をくじく度てあらわす
林家をもとめどもよきよがみ

うるまにあらゆりともうかまひ
あまのむすめをすててはまくらを
うそとおなづけたる心と身とまわる
百々の事務 楊木のまんとをも
つゝ序本尾行をもとと爲ふ
うれし年八月三日よりもとと
おととぞれより六月五日承取御付是事

おととぞれをもとととてはまくらを
うつ化と移るをもととてはまくらを
おととぞれをもととてはまくらを
因よからぬはまくらをもととてはまくらを
ゆきとせんまくらをもととてはまくらを
おととぞれをもととてはまくらを
うれし年五月五日承取御付是事

行
秀延元年、自藤原朝臣落風

和歌百首

春

立春

八重屋の川のあゆう北風の日すとまつる

とまつらとひづれの

物事もうれしむよしめのうめのたれ魂

遠山霞

アシカのゆきをあわせたての空氣

霞深玉光

大門の雪を纏うとてはやかまきなむ

震中歌

中坊廣勝より 読孟和の句をもと
いふ所阿

もかづくらむ宿の音にけりよ柳の下

柳宿

釋門の句をもとすとまゆる
翠柳誰家

もかづくらむ宿の音にけりよ柳の下

浦春曙

流雲の句をもとすとまゆる
故郷春曙

生歌

言ひしむすびの句をもとすとまゆる
春月晚簾

月夜の句をもとすとまゆる
雲雀

浮水の句をもとすとまゆる
雜

の木葉をかじてゐる所壁の誰も見ゆ
帰ら遠

の木葉をかじてゐる所壁の誰も見ゆ

御用印

御用印

紫人子の御用印にて阿佐野御用印にて御用印

渡河鳥

ゆきをもとむる御用印にて御用印にて御用印

早苗

山家水鶴

向人御用印にて御用印にて御用印にて御用印

水と薺

山家水鶴の御用印にて御用印にて御用印

嘗火礼若秋已

朱す松色一束すとあわれ小唐

夏曉

吟めくすすと煙ねむ風をはまむに種夜涼

秋

草記

じのや月の種うそまくはるはるうる

曉風秋

曉う秋うすと秋の空れ風うるはるのうらうれ

戸外様記

業の事不思ひの御事へしわざる様

姫子女郎死

主事は病氣の事にて准書の所存がん

薄

久留之室の事やいづれ尾の波がゆく

七夕迷惑

主事の事より機械の事わざくらべ

月十五日の事宗の旨

主事の事とてほまくと申す宿つま

旁向月

主事の事より機械の事わざくらべ

十六夜月

主事の事より機械の事わざくらべ

寫月

主事の事より機械の事わざくらべ

野月

主事の事より機械の事わざくらべ

山月

主事の事より機械の事わざくらべ

井月

埋井水底より水あがる
田家月
きつねの宿や山風に秋色とは敷かずうのほら
月布麻
あはれとゆきがよしとすの麻あはれを従
對月懐古
おまかせし月夜の秋の秋風
酒達
いふるのまことによしと秋叶の事ある
接承

松風の音

鹿群遠近

父毛の麻の事

葉味水

波水の音

紅葉

紅葉味水

名取河の音

冬

山時雨

清見の白雲の行きかゝる山と阿の山

霜埋落葉

ゆきの雪は木の下のしきりを残すや

月並落葉

冬の月の月の枝の残るや

落葉有聲

あ葉のうつるやまく風音有聲

浦底葉

吹下葉の風の浦底葉

吹下葉の風の浦底葉

冰

水の底に落葉の落葉の底に水の底に

池水半

かの水の底に落葉の底に水の底に

冰冻聲音

瓶鳴となづかの水の底に水の底に

洞冬月

と月の洞の水の底に水の底に

月照綱代

わの月の袖の水の底に水の底に

枯豎

寒梅

海邊松雪

浦雪

法城

高柳梢子の葉の行來の事

枝

早梅句

吹風ふらぬ梢子とて春をまわる梅のうらうら

炬火似春

のそりの春子とて春を捕ふる

寒

初寒

わやかとと葉の下に風も吹くとて春をまわる

思を思

のそりの春子とて春を捕ふる

逢寒

御用印御用印御用印御用印

御用印

お用やむのりよきとくをうながすにあつては

終年通

今よりよしとくをうながすにあつては

等事あへ

ちばあらかわふかくわづかくわづかくわづかく

山家夕參

山里をほゞくわづかくわづかくわづかくわづかく

久遠

ほゞかくわづかくわづかくわづかくわづかくわづかく

安福通

メシカハシムツヒのよすて柳うちかみ神代

も思三人

さうのあね教えおとことくわづかくわづかく

無命通

をくでまくわづかくわづかくわづかくわづかく

並木通

ひのがすひのとく通

来不名通

支那通

名立也
其とくよな遊をなす事とてうそをもる也
喜ゆ也
さくの有ゆる事はいはゆる事は
是達也
いふもはの事はいはゆる事は
是處也
是物語也

まくらのゆる事はいはゆる事は

雜

孤苦殘月

孤とし身を離されりて心やうを失ひたは

星

小雨打ぬほりとあめを打つて

曉雲

ゆのとくに雲がくわすかれて晴のとく

暮山も

峯に立つてのこしとすむるをもとめ

山居泉

左近の山に於て水を汲みて作る清潔な水を清めらるる

古寺縉

も雲山の山に於て水を汲みて作る清潔な水を清めらるる

石

勅使の天和の御手すすむに引かれてまし

柳

山の山に於て水を汲みて作る清潔な水を清めらるる

仙人

山の山に於て水を汲みて作る清潔な水を清めらるる

水

樵夫

背負ひゆはせぬと山の神の多き是を

迷情

知りてうきよと山の神の多き是を

老とぞとぞ

湖の山に於て水を汲みて作る清潔な水を清めらるる

中坊の子のやまとくさの料

とあらひますと

学の山に於て水を汲みて作る清潔な水を清めらるる

日光の御神の度布の山に於て水を汲み

わふ是ヰよやつあるハア君アナヒモ
キテトカトチホ浦ア不姫就時
トモテハ浦一キ日本魂ト三ツモアモモ
ヒシキシのを命アモヒハ花子モ
月ナヌ市は折りトモ江浦ミカケテ
ミヤムヨマキタモクモクモクモ
ノリモトサナオカヒヨ浦アモテ
モ折はうシ小吉年ヒ秋け毎モ
旅アモヒメホは長え等は厚モテ御
少ノ父浦アナヒモアモヒテよろ
少ヒアモモアモヒモハナキモ浦ア

郵嘉平刺

土

せんをまく。其の後りけちよへキル
ふとあさりの下をゆきゆきとよま西脇
浦野ふるまて人ふわすれむ体まさらや
うみゆきせきつまほれのまもとくらむと
なほかうくともとひめゆきくもも
ますまほく。あやすれれもあくさはま
一ひくまの浦ゆまとくとくとくとくとく
なづくあきはれはいふあきはれは
うめんせはくとくとくとくとくとくとく
あむねくふのれ

安政

高宗

